399 (574)
第~~397~~回（572）　＜読書会＞例会資料
『ジャン・クリストフ』第８巻「女友達 最終」

2023年10月28日（土）午後２時－４時
発表　四宮こころ
朗読　松田　有美

「彼女の咎ではないのだ」とオリヴィエは思った――
「僕の咎なのだ。彼女を愛する僕の愛し方がよくなかったのだ。それでも僕はずいぶんあの人を愛した。しかし、僕はあの人に僕を愛させることができなかったのだから、結局僕はあの人を愛する愛し方を心得なかつたのだ」
こんなふうに彼は自分自身を責めた。そしてたぶんそれは当然のことでもあった。しかし、もう過ぎ去ってしまったことについて今更あれこれと宣告をくだしてみたところで大した甲斐はない。もう一度初めからやり直せるとしたところで、今のこんな後悔が、もう一度同じことを繰り返さないように防ぐ力をもつてもいないだろうし、そしてとにかく過去へのこんな執着的な後悔は、現在を生きることを妨げる。

夏が来てからもまだしばらくは病気だった。クリストフはアルノー夫人に手伝われながらオリヴィエの看護を親身にした。そして彼らはオリヴィエの病勢をくいとめることはできた。しかし心の病に対しては彼らはどうにもできなかった。そして彼らは、オリヴィエがいつまでたっても同じ悲しみに惹きまとわれているのにはほとほと愛想が尽きて来て、逃げ出したくなってきた。

不幸な人間は奇妙な孤獨の中へ陥る。人々はその不幸への本能的な嫌悪を感じる。人々はその不幸の感染を恐れるかのようである。とにかくそれはうんざりさせる。人々は避けるようになる。われわれが悩むときに、悩んでいるわれわれの様子に対して寛大な態度をとってくれる人々の数の何と少ないことか！

クリストフがほんとうに感じていたことについては、彼はそれを誰にも―いちばん親しい友らにさえも―言い現わしようがないのであった。それを口に出せば相手を途方にくれさせるだろうことが彼に解っていた。親友のクリストフさえも、オリヴィエのこんなにしつこい悩みにはしびれを切らしてしまった。クリストフは自分がそれを治してやるだけの力がないと自認せずには居られなかった。
結局のところ真相はこうだったのである―
つまり、自分自身のことに関しては悩みの試練をいくつも受けてそれらを乗り超えてきている、大きい気風の人間クリストフは、オリヴィエの悩みを共感的に理解することがどうしてもできなかったのである。

オリヴィエをたいそう愛しているにもかかわらず、クリストフはオリヴィエを避けないでは居られなかった。彼はあまりに強かった。あまりに丈夫だった。空気の通わない、こんな悩みの中では呼吸ができなかった。どんなにか自分を恥じたことだろう！ 自分が親友のためにどうにもしてやれないことがたまらなく腹立たしかった。

彼は、セシールとそして彼女に委ねられた子供に会いに行った。セシールは、急に養母になって感じる母性愛のためにその様子が浄化されていた。

今やクリストフはこれまでと違った目でセシールを見た。
クリストフみたいな男は、自分にとつて慈惠的でありうる女性を癒することは稀であり、自分を悩ますことのあるような女性を恋しがちである。正反対の者たちが相引く。「自然」は自己破壊への傾きをもっている。「自然」は、自分を燃やして滅ぼす強い生命を、小心翼々の生命よりも好んで選び取る傾向をもつ。最も長命することが掟でなく最も強く生きることが掟であるクリストフみたいな男にとつては、そんな「自然」のやり方が最もに思える。

しかしフランソワーズほど鋭い洞察力をもつていないクリストフは心の中で言った——
恋は一つの盲目的な、不人情な力だと。たがいに辛抱のできない人間同士を結び合わせたりする。
幸福な恋は意志を弱める。 不幸な恋は心を破る。恋はいったいどんないいことをするのか？
そしてクリストフがこんなふうに心の中で恋の神様の悪口を言っていたとき、彼は恋の神様が彼に向かって「恩知らず！」と言いながら優しく皮肉に微笑するのを見た。

＊

一度ならず彼のために力したあの不思議な未知の友が、依然としてクリストフの〔ドイツとの関係における〕念願を成就させる骨折りをつづけていた。ドイツとの関係を望ましい解決へ押しすすめるための助力をクリストフに與えつづけている愛情の手を、クリストフは一度ならず感じさせられていた。誰かしら或る人がクリストフの上を見張りしてくれているのだが、その人はどうしても名を名乗り出て来ないのだった。
クリストフはその人が誰であるかを知ろうと努めた。しかし、その友は、クリストフがもつと早くからその人と知り合おうとしなかったことを口惜しがっているらしかった。そして依然としてその友の正体はつかめなかった。

朗読①　みすず書房　461 頁　下段

グラチアは 22 歳であった—。若くて美しく、そして人に気に入ることができ、また何が人に気に入るかが解ることは大きな力なのである。そしてまた、自分のいろいろな願望と自分の運命とのあいだの調和の中に自分の幸顔を見出す、たいそう健全な、たいそう晴れやかな、落ちついた心をもっていることも同様に大きな力である。生命の樹木の花が満開だった。しかもその開花の状態は、イタリーの土地の

光とそして力づよい平和とによってはぐくみ育てられたラテンの魂の静かな音楽を少しも失っては居なかった。彼女がパリの社交界の中で一つの勢力を得たのは至極当然なことだった。

朗読②　みすず書房　466 頁上段
朗読③　みずず書房　468 頁上段

「ああ！」とクリストフは嫉妬して言った―　「あなたはあの方を恋していらっしゃるのですね？」
「ええ」と彼女が言った。
彼は立ち上がった。
「こきげんよう」
彼女も立ち上がった。その瞬間に初めてクリストは彼女が妊娠していることに気がついた。すると彼の心に、味気なさと、愛情と、嫉妬と、はげしいいとしさとの入り混じった何とも言えない感じが起こった。戸口で振り向いて、彼女の両手の上にうつむいて、永いあいだその手に接吻した。彼女は身動きせず、両手の目を半ば閉じていた。ついに彼は再びからだをまっすぐに起こして、彼女のほうへ振り返らずに急ぎ足で出て行った。

「諸聖人の祝日（11 月 1 日）」。クリストフはセシールの住居に来ていた。セシールは子どもの揺り篭のそばに居り、その揺籃の上にアルノー夫人がうつむきこんでいたが、夫人は通りがかりに立ち寄ったところだった。クリストフは夢見ごこちにふけっていた。自分は幸福を取り逃してしまったと彼は感じていたが、しかし愚痴をこぼす気にはなれなかった。幸福は実在していることを彼は知っていた・・・太陽よ、たといお前の姿が私に見えないときでも私はお前を愛することができる！永く続く冬の日々のあいだ、私は影の中で寒さに震えていても、私の心はお前に充たされている。私の愛が私を温めていてくれる。私は知っている―　お前がいつでも実在していることを・・・

朗読④　472 頁上段

朗読④